

ODIP 4.4 修正パッチ (P1040413006436) リリースノート

2025/12/3

(株) インテリジェント・モデル

ODIP は、(株) インテリジェント・モデル社の登録商標です。

本書に掲載された情報に基づいた行為の結果として発生した損害、利益の損失、経費などについて、(株) インテリジェント・モデルならびに本書の製作関係者は一切の責任を負いません。

本書は著作権法上の保護を受けています。本書の一部あるいは全部を無断で転載・複製することは法律で定められた場合を除き、禁止されています。

目 次

A. 変更内容	4
1. ジョブ開始時の出力テーブルチェックを指定するオプションの追加.....	4
2. job.rebuild.index オプション関連機能の改定	4
3. DB アクセスログ出力機能の拡張.....	5
4. 明細ユーザビューの設定値の問題の修正	5
5. 下位 JoinGroup の SELECT 文が実行されない場合がある問題の修正.....	5
6. 一括削除管理単位 of 修正	6
7. その他の修正.....	6
B. パッチ適用による影響	6
C. パッチの適用方法.....	7
1. ライブラリファイルの更新.....	7
2. パッチ適用後の確認.....	7

A. 変更内容

1. ジョブ開始時の出力テーブルチェックを指定するオプションの追加

テーブルへの出力でロードタイプが「再作成」以外の場合、ジョブ開始時に出力テーブルに関するチェック（テーブル存在チェック、テーブル作成、レイアウトチェック、レイアウト変換、インデックス存在チェック、インデックス作成等）の実施有無を指定するオプションを追加しました。処理時間を短縮したい場合など、必要に応じてチェック処理をスキップすることが可能です。

odip.ini の追加オプション（アドミニストレータ／トランスフォーマ）

オプション	説明
job.output.table.check.enabled = [true false]	ジョブ開始時の出力テーブルのチェックをするか否かを指定します。このオプションは出力データセットが「テーブル」かつロードタイプが「再作成」以外の場合のみ有効です。デフォルト値は true で、従来と同様に出力テーブルのチェックを行います。false を指定すると出力テーブルのチェックをスキップします。

2. job.rebuild.index オプション関連機能の改定

- (1) 標準の管理単位でテーブルに出力する際、そのテーブルを入力している他の管理単位が存在する場合に、リレーションキーなどに ODIP が自動的にインデックスを作成する条件を以下のように変更しました。
 - ・変更前：ロードタイプが再作成 かつ job.rebuild.index が true
 - ・変更後：ロードタイプが再作成 または job.rebuild.index が true
- (2) 追加・更新・削除の管理単位でテーブルに出力する際、ロードタイプが「全置換」の場合、従来は job.rebuild.index や startjob コマンドの -autoconv オプションの設定値によって出力テーブルのインデックス削除やレイアウト変換を行っていましたが、インデックス削除やレイアウト変換を行うのは標準の管理単位だけに統一しました。改定後はそれらの設定値に関係なく、レイアウトチェックのみを行うように変更しました。レイアウト相違がある場合は異常終了します。
- (3) 標準の管理単位でテーブルに出力する際、ロードタイプが「再作成」以外で、出力デー

タセット定義にあるインデックスが実テーブルにない場合、従来は `job.rebuild.index` の設定値に関係なくインデックスを作成していましたが、`job.rebuild.index` が `true` の時のみインデックスを作成するように変更しました。

3. DB アクセスログ出力機能の拡張

`startjob` 以外の方法で実行した場合も、DB アクセスログ (`dbaccess.log`) を出力できるようになりました。`execjob` コマンドと WebAPI からのジョブ実行で出力するには、`startjob` と同様、トランスフォーマの `odip.ini` の DB アクセスログ関連のオプション (先頭が `server.dblog.` で始まるオプション) を指定してください。アドミニストレータ (インタラクティブモード、バックグラウンドモード) からのジョブ実行で出力するには、アドミニストレータの `odip.ini` で、トランスフォーマの `odip.ini` と同様のオプションを指定してください。

4. 明細ユーザビューの設定値の問題の修正

(1) 追加更新削除のユーザビューの設定値が置き換わる問題の修正

アドミニストレータの追加・更新・削除のユーザビュー画面で、出力属性にリテラルを設定した状態で、ユーザビューの「プロパティの変更」や「出力データセットから更新」を行うと、その設定値が出力属性と同名の属性 (同名の属性がなければ `null`) に置き換わる問題を修正しました。

(2) ピボット変換で明細ユーザビューの設定値が `null` で出力される問題の修正

ピボット変換 (縦横変換/横縦変換) を使用した明細ユーザビューで、元属性/設定値に属性以外の値を指定すると出力結果が `null` になる問題を修正しました。

5. 下位 JoinGroup の SELECT 文が実行されない場合がある問題の修正

以下の条件をすべて満たす定義を実行すると、下位 JoinGroup で定義したデータ取得の SELECT 文が実行されない問題を修正しました。

<問題が発生する条件>

- ・下位 JoinGroup (例えば JoinGroup1.1) に複数のデータセットが存在する
- ・下位 JoinGroup の 2 番目以降のデータセットと上位 JoinGroup (例えば JoinGroup1)

のテーブルとの間にリレーション定義がある

- ・ 下位 JoinGroup の 2 番目以降のテーブルのリレーション定義の上位 JoinGroup 側の属性の値が null

6. 一括削除管理単位の修正

(1) データベースが異なるテーブルを結合したときの問題の修正

SQLServer の一括削除管理単位で、削除対象テーブルとデータベースが異なるテーブルを結合しているときに、ODIP により発行される DELETE 文のデータベース名が一律、削除対象テーブルのデータソースのデータベース名となっていたものを、各テーブルのデータソースのデータベース名を使用するように修正しました。

(2) ファイルデータソースで実行できる問題の修正

一括削除管理単位が本来対応していないファイルデータソースを指定して実行できていたため、処理をストップするように修正しました。

これまでの挙動は以下の通りでした。

- ・ 削除対象データセットにファイルデータソースを指定した場合、エラーが発生
- ・ 削除対象以外のデータセットにファイルデータソースを指定した場合、ファイル名と同名のテーブルを結合条件として DELETE 文を実行

7. その他の修正

(1) WebAPI からジョブを実行した場合に、HiRDB の設定ファイル (hirdb.properties) の大文字と小文字を区別するオプション (name.case_sensitive) が効かない問題を修正しました。

(2) スレッドモードでジョブを実行した場合の DB 接続にコネクションプールが使われない問題を修正しました。

(3) HiRDB のインデックスを削除する際に発行する DROP INDEX 文が構文エラーとなり、インデックスが削除されない問題を修正しました。

B. パッチ適用による影響

既存の定義への影響はありません。

C. パッチの適用方法

本パッチは、次の ODIP 製品に適用してください。

- ODIP アドミニストレータ v4.4
- ODIP オペレーションマネージャ v4.4
- ODIP リポジトリマネージャ v4.4
- ODIP プロセスマネージャ v4.4
- ODIP リポジトリサーバ v4.4
- ODIP トランスフォーマ v4.4

1. ライブラリファイルの更新

実行中の ODIP 製品を終了し、ODIP_P1040413006436 フォルダに格納されているライブラリファイルを、表 1 のファイルのコピー先に上書きコピーしてください。

表 1 ODIP_P1040413006436 のフォルダ構成及びファイルのコピー先

ODIP_P1040413006436	ファイルのコピー先
lib	
ADM	ODIP アドミニストレータの lib フォルダ
OPE	ODIP オペレーションマネージャの lib フォルダ
RPM	ODIP リポジトリマネージャの lib フォルダ
RPS	ODIP リポジトリサーバの lib フォルダ
TFM	ODIP トランスフォーマの lib フォルダ

2. パッチ適用後の確認

パッチ適用後は、各製品を起動し、表 2 の確認方法に従って確認を行ってください。

表 2 パッチ適用後の確認方法

製品名	確認方法
ODIP アドミニストレータ	ヘルプメニューから“ODIP について”を選択し、表示されたすべてのビルド ID が 1040413006436 であることを確認してください。
ODIP オペレーションマネージャ	
ODIP リポジトリマネージャ	
ODIP プロセスマネージャ	
ODIP リポジトリサーバ	ODIP リポジトリマネージャのツールメニューから"ORMS サーバ情報"を選択し、“バージョン情報”タブを開き、表示されたすべてのビルド ID が 1040413006436 であることを確認してください。
ODIP トランスフォーマ	ODIP トランスフォーマを起動し、showserver コマンドを、オプションに“-info version”を指定して実行してください。表示されたすべてのビルド ID が 1040413006436 であることを確認してください。

以 上